

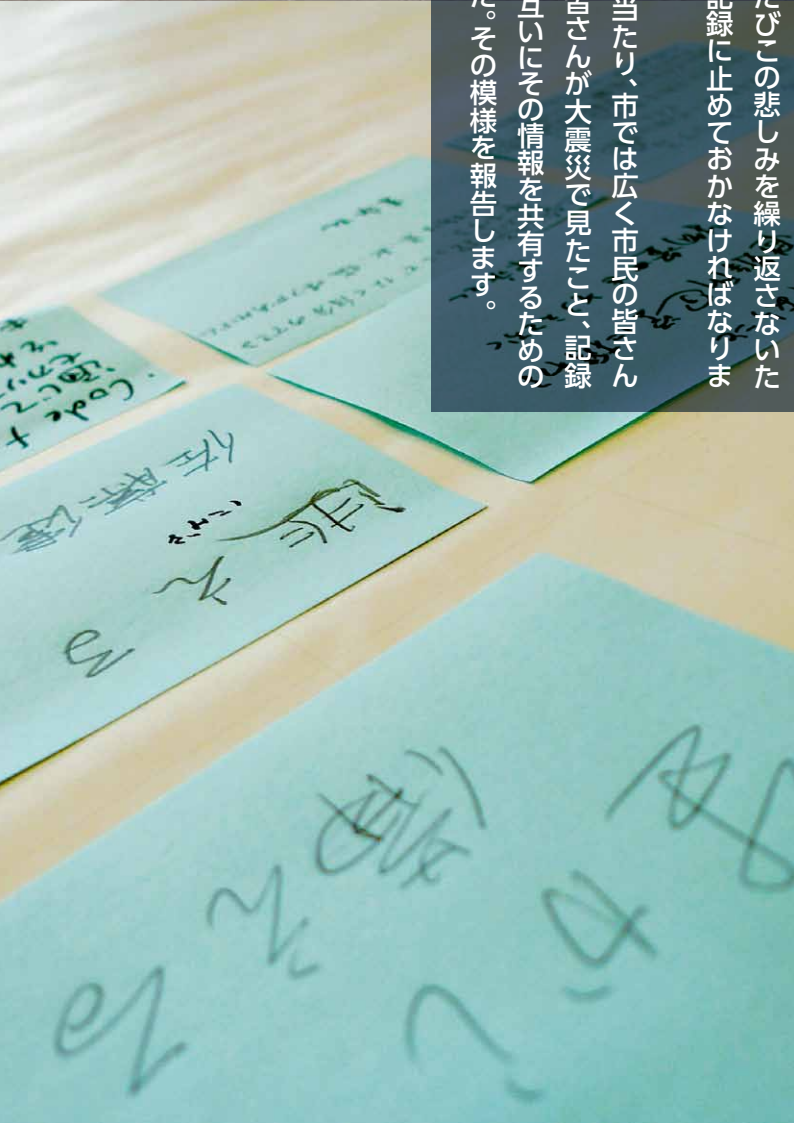


塩竈市東日本大震災記録誌作成事業 関連ワークショップ

東日本大震災によって、塩竈市は本土地区も浦戸地区も甚大な被害を受け、多くの命と財産が奪われました。

しかし、どんなに被害が甚大でも、時がたつにつれてその記憶は風化していきます。将来ふたたびこの悲しみを繰り返さないために、震災の記憶は何としても記録に止めておかねばなりません。

この震災記録誌を作成するに当たり、市では広く市民の皆さんにも参加を呼び掛けて、市民の皆さんが大震災で見たこと、記録したことを持ち寄っていただき、互いにその情報を共有するための「ワークショップ」を開催しました。その模様を報告します。





「津波災害の視点から塩竈の歴史を知る」、「震災当時に撮影した写真を見せ合いながら、当時を振り返る」、「3年以上たった今、まちがどのように変わってきたかを見直す」。

ワークショップにはこの3つのテーマが掲げられました。広報誌やチラシ、ホームページで公募した結果、市内に在住あるいはお勤めの10代から70代、延べ50名余りの方々が参加しました。

第1回

塩竈の津波と復興の歴史にふれる

塩竈市出身で仙台市教育委員会文化財課の木村浩二さんを講師に迎え、塩竈というまちの成り立ちや位置付け、役割などについてレクチャーを受けました。

前半は縄文時代から今へ続く塩竈の歴史について、後半は過去に塩竈で起きた地震と東日本大震災について、お話しいただきました。

平成26年6月15日「日」

14時30分～17時

ふれあいエスプ塩竈学習室1
テーマ1「塩竈の歴史を聞いてみよう、考えてみよう。」
テーマ2「東日本大震災と塩竈の震災と復興の歴史」



第2回

3・11の記憶を写真から呼び起こし、共有、伝承する

震災時の写真を参加者が持ち寄り、どのような状況で写真を撮ったのか、またその時どういう生活だったのか、当時の様子を語り合いながら記憶の共有をしました。震災から3年半を振り返り、今後どのようにしてまちを復興させていくのかということ、市民の皆さまと話を深めていきました。

平成26年6月29日「日」

13時30分～15時30分

ふれあいエスプ塩竈学習室1
公開サロン「アナタの撮った3・11を見せてください。」



第3回

復興の歩みを知る、感じる

前半は、撮影された震災直後の現場を訪ね、まち歩きをしながら現在の状況を定点撮影しました。復興の様子や何を感じるか、考えていただきました。

後半は、実際に歩いてみての感想や、将来の塩竈への希望などについて、市民の方に自由に意見を出し合ってもらいました。

平成26年7月12日「土」

13時30分～16時

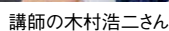
老番館5階和室1（周辺撮影）
まち歩き「3・11のイマを訪ね歩きましょう。」



塩竈の津波と 復興の歴史にふれる

縄文時代の松島湾沿岸の地域は日本でも有数の貝塚が発達したエリアであり、遺跡の宝庫です。最も古いものは塩竈から外洋に離れたところにある舟入島の貝塚で、約6000年前のものです。

また、塩釜港の南隣、七ヶ浜町の^{だいぎがい}大木囲貝塚にあった集落には、約2000年間、人々が住み続けていたことが分かっています。この頃の気温はとても温暖で、今よりも2度から3度ほど、年平均気温が高かったようです。



辺で暮らしました。しかしその象徴である貝塚は、海から少し離れた高台にあります。そのことから、縄文時代の人々は今よりも津波に対する防災減災の意識があつたのではないかと考えられています。

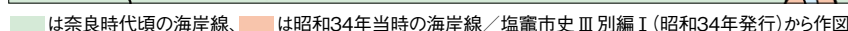
このように塩竈周辺には縄文の昔から絶えず人が住んでいて、多くの人々の暮らし、営みが続いてきました。これが塩竈の歴史であると、まず認識してください。

こうづまち
「香津町」という
地名の由来

塩竈には「香津町」という地名があります。これは大正5年に命名されたという記録が残っています。

かつて国府は「こう」、港は「つ」と読み、
国府の港で「こうつ」と読みます。おそ
らく「かつてここに国府の港があつた」
という聞き伝えを元に漢字を当てはめて
「香津」と定めたのだと考えられます。

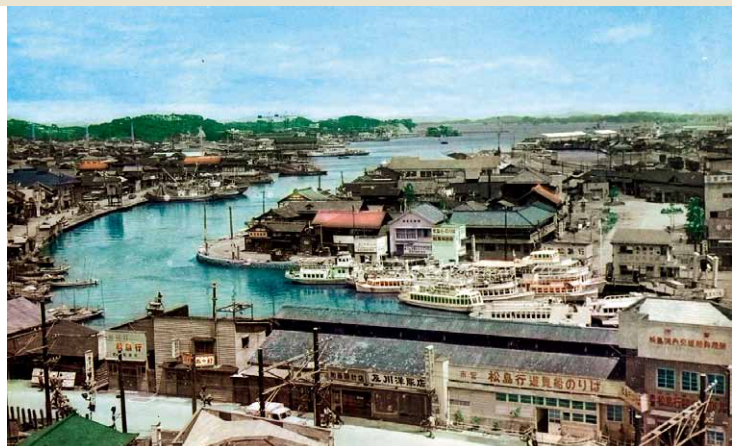
また、古い地図を見ると、舟戸と呼んでいた地区まで千賀の浦が入り込み、香津町のすぐ下が海になっているのが分かります。今の西塩釜の駅の近く、佐浦町界隈です。現在では開発や埋め立てで痕跡は一切失われてしまいましたが、そうだったことから、奈良・平安時代に陸奥国府である多賀城の専用港がかつて塩竈にあったということが伺えます。



海を活かし、 海とともに生きてきたまち

江戸時代になって100年ほどが過ぎた元禄年間。当時の塩竈の町割りを推定した図を見ると、塩竈の町の様子が大きく変化していることに気付きます。入り江がだいぶ埋め立てられ、平坦な土地がどんどん広がり、「新町」や「新河岸」など、埋め立てによって新しくできた土地であることを示す町名が地図上に現れてきます。

今の地図と比べると海岸線が全く違うことから、今の塩竈の中心地は、埋め立てた場所にあるということが分かります。



塩竈神社より塩釜港、松島の島々を眼下(昭和20年代)

この平坦な中心地は、中世以降の度重なる埋め立てによってできた新しい土地なのです。

東日本大震災で津波被害のあった場所と、埋め立てられた場所を重ねてみると、古地形に沿う形で津波被害に遭っていることから、埋め立て地がいかにリスクの高い土地だということが、今回の地震により浮き彫りになりました。

塩竈は、常に海を活かし、海とともに生きてきたまちです。政治の中心地と密接に連携しながら、発展してきた歴史があります。何千年も前から、海や港、神社と密接に結びついた商業の町。いろいろな側面を持ちながら、港とともに発展してきたまちでもあります。

有史以来、幾たびもの地震や津波に襲われながらも、その度に力強く何度も立ち上がってきました。

歴史を振り返ってみると、大きな地震・津波が一定周期で発生していることは明らかで、塩竈は過去何回も津波に襲われています。しかしながら、塩竈も含め、海を生業にしている漁村は海からは離れて暮らすことはできません。

だからこそ、「津波はいつ来てもおかしくないのだ」という意識を常に持ち続け、自然災害が起きたときの心構えを持って対応することが「減災」につながるのだと思います。

「貞観地震津波」と 「慶長の地震」

東日本大震災以降、「貞観地震津波」の存在があらためて知られるようになりました。「貞観地震津波」は、平安時代に東北部太平洋側を襲った大地震・大津波です。

平安時代初期の歴史書で皇室の公式記録である『日本三代實録』の条文の中に、貞観11(西暦869)年5月26日に国府多賀城を襲った大地震と津波の様子が記されています。

それは、地震直後の生々しい国府多賀城周辺地域の様子を記したものです。記録は簡潔ながら、甚大な被害の様子を伝え、この度の東日本大震災の状況と全く変わらない光景が、平安時代のこの記録に表現されています。



貞観十二(869)年五月二十六日条

廿六日癸未、陸奥国地大震動、流光如屋隱映、頃之、人民叫呼、伏不能起、或屋仆死、或地裂埋殮、馬牛駭奔、或相昇踏、城郭倉庫、門櫓牆壁、頽落顛覆、不知其數、海口嗥吼、声似雷霆、驚濤涌潮、沂洄漲長、忽至城下、去海數百里、浩々不弁其涯涘、原野道路、忽為滄溟、乘船不遑、登山難及、溺死者千許、資産苗稼、殆無孑遺焉、

【意訳】二十六日、陸奥国で大地震が起きた。光が流れ屋のように見え隠れした。人びとは叫び、伏せて起き上がることができなかった。ある人は家屋が倒れて圧死し、ある人は地割れが起きて埋もれ死んだ。馬や牛は驚いて走り、互いに踏み重なった。国府多賀城の建物や倉庫、門や櫓や塀など、崩れ落ちたり倒れたりしたものは数えきれない。河口は吠え叫ぶようで、その音は落雷のようにとどろいた。巨大な波がわき上がり、潮が満ちるように遡ってきて、多賀城の城下まで津波がきた。海岸から数十里まで広く浸水して水際の区別がつかなくなった。野原も道路も全て一面大海原のようになった。船に乗る時間もなく、高台に避難することもできず、千人にも及ぶ溺死者がでた。財産も植えた稲苗もほとんど残らず流失した。

また、江戸時代に入り慶長16（1611）年にはマグニチュード8.1と推測される「慶長の地震」が起きました。江戸時代にとめられた仙台藩の記録である「貞山公治家記録」の中で、はじめて「津波」という言葉が使われました。江戸時代の270年間には、12度ほどの地震があったことが記録されています。

地震と津波の発生には一定の周期がある

江戸時代に残された記録。発掘調査から判明している有史以前の津波。そして明治時代以降の記録を加えると、東部太平洋側の大地震の発生には一定の周期がある、ということが分かりました。

周期の間隔には2種類があります。一つは400年・800年という長周期で発生する巨大地震。先に記した「慶長の地震」は奇しくも、東日本大震災のちょうど400年前に起こっています。



そしてもう一つは25〜35年という短周期の大地震です。これには36年前の「宮城県沖地震」が当てはまります。この短周期は私たち人間の平均世代交代年である30年に相当します。つまり、残念ながらそれは私たちの記憶が風化しはじめ、次世代へ伝わりにくくなる年限でもあるのです。

また、過去の事例によると、本震の発生から3〜5年の間で、本震のマグニチュードより1ランク下の余震・誘発地震が発生しています。東日本大震災はマグニチュード9.0。1ランク下でも8.0です。阪神淡路大震災のマグニチュードが6.9ですから、阪神淡路大震災よりもはるかに大きな余震・誘発地震が起きる可能性もあり、まだまだ気を緩めてはいけません、ということをおぼろげに忘れている人は多いかもしれません。

古いことを認識し 未来へ教訓を活かしていく

こうして歴史の断片を並べてみると、地震が一定の周期で来ていることが、あまり出ないように見えてきます。

天災を防ぐこと——『防災』は難しくても、天災の被害を減らすこと——『減災』はできます。時が流れれば、記憶が薄れていくのは仕方のないことかも知れ

ません。しかし、定期的に震災を思い出したり、語り合う機会を作ること、少しでもそれを食い止めることができるのではないのでしょうか。体験や記憶を記録し、それについて話し合うことが何より重要です。

『温故知新』。東日本大震災を経験した私たちは、この出来事を明日に伝えていかなければなりません。

古いことをきちんと認識して、これからの未来にその教訓を活かしていく。それには私たち一人ひとりの小さな心掛けが大切だと思います。例えば、今日ここで聞いた話を家族や友達に伝える。『こんな話を聞いてきた』と話して、日常的な話題にしていく。地道なことですが、そういうことの積み重ねが、災害に対する意識を強くさせるはずなんです。

塩竈に暮らす市民も参加して取り組むこの震災記録誌が、後世の人々に語らうの機会を生むことを願っています。



津波到達点を示す石柱（塩竈市西町）



木村浩二さん PROFILE

1952年	塩竈市生まれ
1974年	東北学院大学 文学部史学科(考古学専攻)卒業 福島県教育委員会文化課勤務
1978年	仙台市教育委員会社会教育課勤務
2004年～	地底の森ミュージアム 学芸室長
2009年～	仙台市教育委員会文化財課に勤務 現在に至る
現 職	仙台市教育委員会文化財課 専門員 宮城学院女子大学 人間文化学科 非常勤講師 東北古代史(日本考古学協会会員・宮城県考古学会会員)
専 門 著 書	「仙台市史 特別編2 考古資料」(古代分) 「仙台市史 資料編1 古代中世」(共著) など

第2回

3・11の記憶を 写真から呼び起し、 共有、伝承する

3年半が過ぎて 震災を語り合うという意義

ワークショップの第2回目では、参加者の方が撮影した写真を見ながら当時の様子を思い出し、それぞれの記憶を皆で語り合いました。震災から3年半が過ぎ、記憶は少なからず薄れてきていますが、



写真を通して自らが経験した東日本震災を語り合うことで、皆の記憶を共有し合う貴重な時間となりました。

ファシリテーターを務めた田中聡子さんは塩竈市出身。ご実家は一森山で、現在は仙台市に住み活動しています。

大きな揺れを感じた瞬間、 それぞれの2時46分

はじめに仙台市在住の衛藤雅之さんからご自身が撮った写真を解説していただきました。衛藤さんは塩竈に住む同僚の安否を確認するために、3月16日に仙台から国道45号を塩竈へ向かいました。その時初めて津波被害を見て、絶望感を感じたそうです。夕方になってようやく同僚の自宅に到着。建物の破損に驚きながらも大声で呼び掛けると、同僚は中から着の身着のままで出て来て、その姿を見てひと安心した、と当時を振り返ります。

泉ヶ岡にお住まいの末永榮子さんは、発災時、歯の治療中でした。電灯が点滅し、机は右に左に動き、危険を感じたため治療台に必死につきまり、揺れが収まるのを待っていたそうです。家に逃げ帰り、家屋を確認してから、近所の一人暮らしの方へご主人と一緒に声を掛けて回りました。津波が来ているとは全く知らず、水道が止まるから、とバケツ、ヤカン、

衣装ケースなど、ありとあらゆる入れ物に水を汲み置くことを最優先に行動したそうです。

野田明宏さんは写真が趣味で普段からよく撮影されている方。震災当時はマリネットに向かっていたところ大きな揺れを感じ、直感的に「津波が来る」と感じたそうです。すぐに帰宅したものの家族は不在で連絡が取れず、町内会で集まり情報を受けたり避難を指示されていたそうです。

後楽町にお住まいの土見大介さんはその日仕事早く終わったため、自宅で昼食後ゆっくりしていたところでした。幸い自宅や近所に大きな被害はなく、友人と「大きかったね」とツイッターで連絡を取り合っていたそうです。雪が降る中、鹽竈神社に行つて初めて津波が来たと聞き、大変なことが起きたと思ったそうです。

高校教師の小川進さんは直後からカメラを手に取り、写真を撮って回りました。塩竈に来る前は気仙沼に15年住んでいたことから津波被害が気掛かりだったそうですが、一週間後に通行止めが解除され、やっと行くことができたそうです。

他にも、「夜勤明けで就寝中地震が起きたが、幸い家族全員が在宅だったため安心だった」と、ご夫婦で参加された穴戸勇太さん。小学生の時にチリ地震津波を体験し、津波の恐ろしさを憶えている熊



谷忠昭さん。写真を見ながら状況を聞くことで、当時の記憶が呼び起こされ、「そうだった、あの時こう思ってた」など、薄れかけていた記憶を思い出すワークショップになりました。

未来の塩竈に生きる人たちに 自分たちが伝えたいこと

ワークショップの後半では、参加者の方がそれぞれ「未来の塩竈に生きる人たちに伝えたいこと」、もしくは、「今、実行していること、したいこと」、「今、私にできること」を考え、付箋紙に自分の思いを書いてもらいました。

参加者の方が撮られた 3.11の写真



マリンゲート塩釜は避難所になり、当初から被災者を受け入れていました。「ゴールデンウィークまでには営業を再開させたい」という気持ちでみんながんばっていました。

(野田明宏さん／平成23年3月16日撮影)



普段はあまり馴染みのない自衛隊の車をあちこちで見かけました。パトカーなども異様に多かったのを覚えています。復旧の車両だけでなく、警備の車も多数巡回していました。

(土見大介さん／平成23年3月14日撮影)



塩釜駅前のヨークベニマル。

自宅の周りは大きな被害を受けていなかったが、これを見て初めて、自分自身が被災地にいるんだ、被災者なんだ、ということあらためて実感しました。

(土見大介さん／平成23年3月14日撮影)



国道45号、尾島町付近。これが初めて見た津波です。

5日経っても冠水したままで、道路は通行止め。看板で迂回を呼び掛けていました。

(衛藤雅之さん／平成23年3月16日撮影)



連絡が取れなくなっていた同僚の自宅付近。津波の爪痕がまだそのまま、瓦礫が散乱する中、ドラム缶で火を起こし、暖をとっていました。

(衛藤雅之さん／平成23年3月16日撮影)



安否不明の祖父を探すため、市内の避難所を回っていました。

マリンゲート塩釜に寄せる避難者の情報が欲しかったので向かったにもかかわらず、たくさんの物が流れ着き、水に阻まれて近寄れなかったときに撮った1枚です。

(土見大介さん／平成23年3月14日撮影)



乾電池がなくて困っていると聞き、全国の知り合いに呼び掛けました。運送会社はストップしていましたが、唯一郵便局はバイクで配達できるものに限っては届いたため、レターパックに入れてもらい全国から約8,000本集めました。それらを整理し、まとめて浦戸諸島に届けました。

(小川進さん／平成23年4月10日撮影)



1週間後、市営汽船が動き始めたので、物資を持って祖父のいる寒風沢島へ行く途中、桂島での写真。津波前は、集落がごちゃごちゃしている印象があったが、津波被災を目の当たりにして、「閑散としてしまったな」というのが第一印象でした。

(土見大介さん／平成23年3月18日撮影)



マックスバリュに行ったときは雪が降っていました。当時はこのとおりで買い物できる店も少なく、店が営業しているかどうかは人が並んでいるか、並んでいないかで判断していました。「営業中」と大きな紙を貼っていたり、外にテントを張って営業しているお店もありました。

(野田明宏さん／平成23年3月16日撮影)



ワカメが終わり次は昆布だ、という時に被災。湾内の瓦礫、砂、航路で航行を妨げるロープなどを、組合員総出で海から揚げ、岸壁で分類しました。

(佐藤健太郎さん撮影)



浦戸諸島に渡る船にはまだ規制があり、乗れるのは島民、親族、災害支援者だけでした。市役所に相談し、物資を届けるため災害支援にしてもらい、乾電池を届けました。

(小川進さん／平成23年4月10日撮影)



中の島の塩釜郵便局付近。ガレキがそのまま手付かずの状態で、車も20日頃まで放置されていました。

(野田明宏さん／平成23年3月17日撮影)



釜ヶ渚。島と島の狭い間から津波が押し寄せ、堤防を乗り越えて流れ込み、200艘の船も、桟橋も流されてしまった。

(佐藤健太郎さん／平成23年5月10日撮影)



復旧工事が終わり、再開した釜の渚漁港マリーナ。ぜひ皆さんには、復旧された様子を見に来てほしいです。

(佐藤健太郎さん撮影)



運転を再開した仙石線に乗り、1カ月半ぶりに塩竈へ。まだ道路に船があったりしたもの、街中は結構片付いていました。イオンの裏に、津波をかぶったはずの桜が咲いていたのが印象的でした。

(衛藤雅之さん／平成23年5月1日撮影)

震災から1カ月後、避難所になった野々島の浦戸中学校の体育館です。その後、寒風沢島に渡りました。縛り地蔵は倒れ、東屋も倒壊していました。

(小川進さん／平成23年4月10日撮影)



津波を被って根元から切られた柳の木。芽が出てきたのを見て、「芽が出ているな、すごいな」と、新たに萌えてくる生命力を感じました。

(末永榮子さん／平成23年12月撮影)



参加者の方が語った 震災の教訓

3日は行政に頼らないで
生きられるように準備する
他人を当てにしないで、
自分で考え、確保しておく。

失敗体験

助かったという話ばかりではなく、
失敗体験も後世に残す。どこに
逃げたか危なかった、どこに逃げた
から亡くなってしまった、など様々な
情報を共有する。

避難所でのマナー教育

防災教育はあるが、今後はマナー
教育も必要。
お年寄りから子ども、幼児、いろん
な人が集まるところでのマナーは、
例えば非常時であっても大切。

逃げることも、準備も、 自己責任で

何かあったときには誰かを責め
がちだが、あくまで自己責任。
「逃げる」として「戻らない」を
徹底する。塩竈は平地が少な
い。今後は高齢者が逃げられる
形を作っていかなければならない。

どこに誰が住んでいるか、 ネットワークを作っておく

ひとりでは不安。町と周りの人たち
を知ることが大切。万が一の時
はどこに避難すればいいのか、
把握しておく。

準備と伝えることを
繰り返して、忘れない
本震の時は動けなかったが、
4月7日の余震の時は冷静に
対応できた。
連絡手段を考えておくこと、
自分でできることをすること。



市民一人ひとりが伝え 震災の教訓を共有化する

今回のワークショップのテーマは、3・
11の記憶を写真から呼び起こし、共有、
伝承する。参加者ご自身が撮った震災時
の記録写真をご持参いただき、その写真
を元にどのような状況で写真を撮ったのか、
またその時はどのような生活だったのかを

参加者の方からは「揺れが3分弱も続
き、こんなに長い地震は初めてだ」とい
う方や、「建物が横に動き、倒れるかと
思った」といった体験が寄せられました。
津波に関しては「津波が来ても、『堤防を
少し乗り越える程度かな』と思っていた」
という方がいる一方、「マリングート塩釜
に向かっていたが直感的に『津波が来る』
と感じて引き返した。チリ地震津波の時
の光景が頭をよぎった」と真っ先に危機
感を覚えた方もいらっしゃいました。
塩竈市は、港を中心に発達した歴史あ
る市街地と、山を切り開いて作られた新
興住宅地からなります。東日本大震災で
は、岩盤を造成した山側では地震の揺れ
が比較的小さく、埋め立てによって作ら
れた市街地を含む海岸部では、揺れが大
きく感じられました。同じ塩竈市内で揺
れの感覚に差があるというのも、そこに
原因があるのでしょうか。

話していただきました。
ライフラインが復旧する前はどうな生
活を強いられていたのか、家族では何を
話し合ったのか、今どんな備えをしてい
るのか。非日常が日常となった時の「震
災後の生活ぶり」は、映像や写真だけで
は伝わりきれず、体験者の思いが加わる
ことでより理解されやすくなりました。
今回のワークショップのように、それ
らの震災体験として語られた話は、将来
きつと役に立つ資料になるはずです。東
日本大震災から3年半を振り返りながら、
当時の様子を語り合うこと、そして記憶
の共有化をすることは、市民一人ひとり
が震災を伝えて行くことにつながり、そ
れが塩竈というまちの将来を描いていく
きっかけになっていくことではないで
しょうか。震災を語るの「今さら」な
のではなく、「今から」だということを実
感したワークショップになりました。



第3回

復興の歩みを 知る、感じる

震災当時の写真と見比べ 街なかの変化を見る

第3回目のワークショップのテーマは「3・11のイマを訪ね歩きましょう。」「大学で地域構想を学びたい」という高校生、塩竈市内でボランティア活動をする20代の女性、塩竈で生まれ育ち、海苔の養殖に携わってきた80代の男性など、さまざまな世代の方々が、さまざまな思いを胸にご参加くださいました。

ワークショップの前半は、まち歩きをしながら震災直後と比べ変化している様子を自身の目で見て、震災直後に撮られた写真と同アングルで写真を撮って「定点観測」をするフィールドワークを行いました。

「定点観測」は、吉番館を出発し、JR仙石線本塩釜駅や「佐浦酒造店」前、マリナーゲート塩釜前など6カ所を巡りました。撮影ポイントに到着すると、当時を思い出させることも多く、参加者の方々は撮影しながらも震災当時の様子について口々に語り合いました。



本塩釜駅付近(村上ゆかりさん／平成23年3月18日撮影)



塩竈市本町(笠原真里子さん／平成23年3月14日撮影)



(平成26年7月現在)



(平成26年7月現在)

発災から一週間後、吉番館のすぐ近くで店頭でテーブルを出して営業する八百屋さん。並ぶ人々は長靴を履いており、塩竈の街なか海水や泥に覆われていることがうかがえます。ご自身も被災しながら、食料品を売ってくれるお店は大変有り難かったと思つた市民も多かったのではないのでしょうか。今では、津波の痕跡もありません。

3月14日に撮影された塩竈市本町の「佐浦酒造店」界隈で、ワークショップ参加者が撮影した写真。海岸への道路が通行できず、車両が手前で迂回していることが、路上に残るタイヤの跡からも分かります。今歩いてみると、ここまで津波が来たという跡はほとんど見つけることができませんでした。

歩いて見えてきたもの、 将来への思い

この日は真夏日。炎天下を1時間歩き回るフィールドワークの後、再び吉番館に戻り、実際に歩いてみての感想や、以前の塩竈よりもいまになるために何が必要なのか、市民の皆さんが目で見えて感じた意見を自由に語り合っていました。





JR仙石線本塩釜駅前(平間眞一さん／平成23年3月14日撮影)



海岸通(津川登昭さん／平成23年3月12日撮影)



(平成26年7月現在)



(平成26年7月現在)

JR仙石線本塩釜駅を背に撮影された駅前の様子です。被災車両が路上にそのまま残され手つかずの様子が分かります。その後、駅前にあった白い建物は解体されました。「ビルが解体された時は、とても違和感を覚えたのに、だんだん風景が見慣れてしまうと分らなくなる」と語る参加者も。

震災翌日の塩竈一番の繁華街、海岸通の様子です。道路は黒い泥に覆われ、中央部で自転車を引く人物が写っています。周辺は汚泥が残る異臭も立ち込めていました。現在では、アーケードは撤去され、多くの商店も解体され更地になっていました。

記憶を記録し、 震災を後世に残すために

フィールドワークで、「アーケードや建物が無くなると街の印象がガラリと変わる。解体されてしまうと、元々そこに何があったのかが思い出せない」という参加者の声がありました。意識をしないと記憶は上書きされてしまい、日々の記憶は残りにくいのです。

記憶を記録する、震災を後世に残す。そのためには私たち市民は何をすべきなのかを考えさせられる、大切な気づきだったのではないだろうか。

3回のワークショップを通し、古地図や書物、地層から分かる塩竈の歴史を知り、そして未曾有の大震災を体験した私たちだからこそ、語り合い、その想いを後世に教訓として残さなければならぬ、という思いを強く持ちました。

日々変わりゆくまちと人。東日本震災はまだ終わったものではなく、現在進行形です。塩竈の長い歴史の一コマとして今回の震災は記録されていくことでしょう。塩竈というまちと震災を記録し続けることができるのが塩竈市民。開催されたワークショップがそのきっかけになることを願います。



参加者の方が語った それぞれの声

商店街を思い出しながら歩いてみたが、お店が一つなくなると、雰囲気がガラリと変わってしまい、思い出すのも難しくなる。

旧亀井邸など、昔の塩竈を感じられる場所を残していれば、どんなに周辺のまちが変わっても、塩竈の歴史と災害記憶を後世に伝えられるのではないかな。

便利さゆえに、多くの方がまた被害があった場所に帰り、繰り返してしまうという繰り返す歴史を知った。自分の代だけではなく、孫、末代までを考えれば市民一人ひとりが語り続ける努力を怠らないことが大切だと思う。

復興が進むのはもちろん良いことだが、町中が変わっていくからわからなくなってくる。例えば昭和初期の建物などは残す方向で進めないと、元々塩竈という町はどのようなまちだったかを伝える必要がある。

3年半で町はここまで変わったが、これからどんどん変わっていく。何か目安になるものがあるれば思い出しやすい。

塩竈はチリ地震の後に街が大きく変わった、という印象がある。この震災を経て、もう一度変える必要があるのではないかな。

今日まち歩きをしてみて、仮設商店街以外に地震の後できたものや痕跡などはほとんどなかった。徐々に復興しているのを感じる。どん記憶が薄れているのを感じる。

塩竈で働き始めたのは最近なので、どこが埋め立てをされているかがわからなかったが、今回の津波で、埋め立てられたところが浸水していることが分かった。

塩竈は、地震に限らず、歴史上災害を繰り返し経験している。災害に遭い、それを踏まえて災害に備える。次の災害が起きて、また備えるその経験や知見をきちんと伝えるべき。

塩竈にはおもしろいものがたくさんあるにもかかわらず、地元の人知らないし、外部に発信もうまくできていないのが残念。
発信の仕方を考えたい。

壊され失ってしまうことは嫌だが、一方で変わっていくのも楽しみなのか、話し合いたいと思った。



街の記憶 I



海岸通（昭和 60 年）



やみ市（平成 21 年）



やみ市横丁（平成 21 年）

震災以降の歩み